「戦時下」におけるお小遣いの行方：『小学生と支那事変貯蓄債券』をめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 熊木, 哲 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1335

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

「戦時下」におけるお小遣いの行方

――『小学生と支那事変貯蓄債券』をめぐって――

熊木　哲

一　「小学児童作文集」について

『小学生と支那事変貯蓄債券』と題された小冊子がある。―小学児童作文集―と副題があるように、「支那事変貯蓄債券」について綴った児童の作文集である。発行日は、昭和十五年四月十五日。発行所は日本勧業銀行国民貯蓄勧奨部。版型は、B六判（128×182）、総ページ数二一八。一ページ二段組み。一段は二三字一五行。

当冊子の発行目的については、巻頭の「はしがき」に明らかである。少々長いが、以下に引用することによって、その目的を概観してみる。なお、以下、引用に際し、本稿では、旧字体は新字体に改めた（在籍学年を示す「尋一」から「尋六」は、尋常科一年から六年生を、「高一」「高二」は、高等科一年生および二年生を示す）。

昨夏小学児童に対し貯蓄心の涵養とその実践に幾分にても御役に立ちたいといふ趣旨から紙製貯金箱を贈呈しました際、校長各位の御配慮により貯金箱―又は貯蓄債券―を題材とする児童の作文を御送り下さる様お願ひして置きました処、幸ひ諸先生の御好意ある御取計ひを得、全国各地より実に三千余篇の応募を見たのであります。よつて茲に

各地の代表的作品一七五篇を選び「小学生と支那事変貯蓄債券」と題し江湖の御一覧に供することゝ致しました。作品は何れも童心溢るゝ中にも時局を強く認識した小国民の意気を感ぜしめて頼もしき限りであります。北は北海道から南は沖縄、台湾に至るまで全日本の第二の国民が支那事変に対し如何に関心を持つて居るか、貴重なる一刻を是非小国民と一緒に過して頂きたいと存じます。

尚こゝに載せることの出来なかつた作品の中にも紙数の関係で不得已割愛した佳作が沢山ありますが、それらは残念ながら別の機会に随時当部発行の印刷物によつて発表させて頂く考へで居ります。

昭和十五年三月　　日本勧業銀行国民貯蓄奨励部

ここに明らかなように、この冊子は、昭和十四年の夏に、全国の小学生を対象として、「紙製の貯金箱を贈呈した際」に依頼しておいた「貯金箱—又は貯蓄債券—を題材とする児童の作文」集である。

「紙製の貯金箱」については、作品「貯金箱」（北海道夕張郡御園尋常高等小学校高一・斉藤藤夫）の冒頭によって知ることが出来る。

昨日、学校で先生から、日本勧業銀行で作つた紙製の組立てる貯金箱を頂いた。全国で「貯蓄、貯蓄」を叫ばれてゐる今日、紙製とはいへ貯金箱を頂いたのは実に嬉しかつた。

早速組立ててみた。紙に書いてあるやうにして組立てて行くと、容易に出来上がつた。戦車の画、飛行機の画、軍艦の画など、非常時日本の意気さへ感じられた。

この作品の題名は「貯金箱」であったが、収録された一七五篇では、低学年の「チョキンバコ」を含めて一六作品。それ以外では、「支那事変貯蓄債券」「しなじへんちよちくさいけん」「支那事変貯蓄債券について」同「就いて」が、五七作品。「貯蓄債券」「ちよちくさいけん」「貯蓄さいけん」が、「の事」「を買ひませう」を合わせて二七作品。

題名においても「貯金箱—又は貯蓄債券—を題材とする児童の作文」という趣旨が反映されたといえる。

「児童の作文を御送り下さる様お願ひして置きました処、幸ひ諸先生の御好意ある御取計ひを得」たことについては、「支那事変貯蓄債券」（鹿児島市宇宿尋常小学校尋五・小斎平サチ子）の冒頭に見ることが出来る。

今日先生がおひるの時間に支那事変の貯蓄債券のことを綴方に書いて来いとおつしやつた時、私はなんのことかよくわかりませんでした。

この作品には、貯金箱については触れられていないので、この学校あるいは学級では、貯蓄債券の「作文」が「先生」から命じられたということであろう。

この冊子は、児童の自発的な作文ではなく、「諸先生の御好意ある御取計ひ」すなわち、児童への課題として書くことが強制されたことが伺われる文集といえよう。「全国各地より実に三千余篇の応募」の実態は、「先生」による児童への宿題の結果であり、「先生」の「百億円貯蓄」への加担を示すものであった。

収録された作品は、「北は北海道から南は沖縄、台湾に至るまで」であったが、掲載数は、台湾一一、北海道一〇、東京府一〇、大阪府六作品。五作品は、愛知県、京都府、福岡県。四作品は、秋田県、神奈川県、富山県、静岡県、兵庫県、和歌山県、長崎県、熊本県。また、二作品は、岡山県、徳島県、愛媛県、高知県。一作品は、青森県と山梨県。これ以外は、すべて三作品。朝鮮半島からの作品は収録されていない。

二　「支那事変貯蓄債券」の誕生

「支那事変貯蓄債券」についての作文を課された児童は「なんのことかよくわかりませんでした」と記していたが、こうした感想は多くの児童が抱いていた。

支那事変貯蓄債券とはどんなものかはつきりわからなかつたので父に尋ねました処、今度の支那事変に対して費用

が沢山要るので支那事変国庫債券の他に、「りんじしきん調整法」と言ふきていが出来て、日本勧業銀行にゐたくして日本勧業銀行より発行されるのが支那事変貯蓄債券で、此名前が生れて以来今日の発行になるのが第十一回だとのことです。

「支那事変貯蓄債券について」（佐賀県小城郡東多久尋常小学校尋五・渡島栄春）の冒頭部であるが、「りんじしきん調整法」とは、第七十二回帝国議会（昭和十二年九月三日召集、同四日開院式。会期五日間、九月八日終了、九日閉院式）で議決をみた「臨時資金調整法」のこと。

昭和十二年九月二十七日より施行された「臨時資金調整法」は、「資金の調整といふことが表面に現れては居るが、その主たる目的は当面我が軍事行動に伴ふ所要資材の需給を調整せんとするに在る」し、「貯蓄を奨励すると共にこれ等資金が時局に緊要なる方面に使用せらるゝやう適切なる調整を加ふる必要」から制定したものであった（大蔵省「臨時資金調整法に就いて」、内閣情報部編集「週報」第五十三号、昭和十二年十月二十日発行）。

「支那事変貯蓄債券」は、「臨時資金調整法」によって認められた「割増金附貯蓄債券」であり、大蔵省「臨時資金調整法に就いて」（前出）によれば、次のような事情を背景とする。

今回の事変中には労銀その他として国内に撒布せらるゝ金額も相当巨額に達するとみとめられるのであるが、これ等労銀収入等の急激に増加した方面に於いては必ずしも平生貯蓄の習慣が行渡つて居らない所もあると考へられるので、此の際各方面の濫費を防ぎ貯蓄を奨励するの要があり、兼ねてこれ等の零細資金を適当に吸収することが金融上其の他の見地より適当と考へられるので、収入金二億円を限り売出価格の百五十倍以内の割増金附貯蓄債券を日本勧業銀行をして発行せしむることゝとしたのである。而して右の券面金額は二十円以下、償還期限は三十五年以内とし、尚割増金は国債証券を以て之を交付し得ることゝし一層貯蓄の趣旨の徹底を期したのである。

つまり、事変によって潤うであろう軍需関係に努める賃金を狙い、かつ、貯金の習慣を付けさせることによって「零細

資金」を国家へ還流させようとするものであった。

「割増金附貯蓄債券の売出し」（大蔵省、「週報」第六十一号、昭和十二年十二月十五日）によれば、第一回売出しは同年十二月十六日からであり、その発行の理由として、次のように記した。

貯蓄の手段は多ければ多い程益々効果が挙がる事を期待し得るのに依ることは勿論であるが、殊に従来の貯蓄の習慣の乏しかつた向、或は従来は貯蓄の余裕が無かつた向に対しても、不知不識の間に貯蓄の実を挙げしめる為に特別の施設を講じようとする趣意に外ならないのである。

郵便貯金、銀行預金、信用組合等の金融機関に対する預金も「夫々相当に利用せられて居る」が、その機会を増やすことによって、国民から資金を引上げようということであり、それは「従来の貯蓄の習慣の乏しかつた向、或は従来は貯蓄の余裕が無かつた向」に対する「特別な施設」として設定されたということであった。「従来の貯蓄の習慣の乏しかつた向」に対する設定であれば理解は出来ようが、「従来は貯蓄の余裕が無かつた向」に対する「特別な施設」とは、その意図はあからさまである。「貯蓄の余裕が無かつた向」にも「貯蓄」へ向かわせる為の「特別な施設」が「割増金附」という餌であった。

今回売出されるのは第一回貯蓄債券額面総額千五百万円、第二回貯蓄債券額面総額千五百万円、合計三千万円であつて条件は両回とも共通である。

一枚の債券の券面金額は十五円であつて之を十円で売出す。償還せられる際には券面金額に依り償還を受けるのであるからその十五円と売出し価格の十円との差額五円が即償還を受ける迄の期間に対する利子に相当するものとなる訳である。

償還抽選は毎年二月と八月との二回に行はれ、各其の翌月に、当籤した番号の債券から順次に償還して行くのであつて、最も遅いものでも二十箇年内に償還せられる。而して抽選償還の都度一等千五百円、二等百円、三等二十五円

の区分に依り割増金を附けることとなつてゐる。明年二月に行われる初回の抽選の割増金の本数は両回分共一等五十本、二等百本、三等八百五十本である。

「割増金附貯蓄債券の売出し」（前出）の一節であるが、こうして第一回は昭和十二年十二月十六日から二十二日まで、日本勧業銀行の本支店、代理店並びに各郵便局において売出された。なお、この割増金附債券は、終戦直前には「勝札」となり、現在の「宝くじ」へと繋がってゆく。

三　「支那事変貯蓄債券」の展開―八十億円貯蓄から百億貯蓄へ

『小学生と支那事変貯蓄債券』に収録された作品には、「今日の発行になるのが第十一回」（前出）の一節があった。「第十一回」の発売日の記述はないが、この冊子の発行から推測すると、第十四回（昭和十四年十二月）が限度か。

では、この冊子に収録された作品から、「小学生」の手元や家にはどの程度「支那事変貯蓄債券」が入っていたかを検討してみると、この冊子に掲載された一七五篇の作品に自分の分や家で買ったとの記述が見えるのは、四〇作品。約二三％ということになる。発売機会を十四回としての割合であるが、高い消化率とはいえないであろう。

「支那事変貯蓄債券」は、その名の示すように「支那事変」への対応を目的とする「貯蓄債券」であった。「貯蓄債券」の発行は、これで三度目となるが、第一回は日露戦争当時の貯蓄債券、第二回目は関東大震災後に発行された復興貯蓄債券であったが、何れも巨額の資金を必要とした際に設定されていた。

「支那事変」における戦費への対応については、次の大蔵省国民貯蓄奨励局による「銃後の国民貯蓄」（「週報」第八十一号、昭和十三年五月四日）に見ることが出来る。

近代の戦ひには莫大な金と物とが要る。今度の事変の戦費として昨年及び本年の議会に併せて約七十四億円の予算

の協賛を得てゐるが、この額は既にわが国が国運を賭して戦つた日露の役の戦費約二十億円の三倍以上にも上つてゐる。かゝる巨額の戦費の大部分は国債の発行に俟たねばならぬし、又時局関係の生産力拡張に要する資金も多額に上るのである。こゝに於て政府は「今後発行セラルベキ国債ノ消化ヲ図リ、且ツ必要ナル生産力拡充資金ノ供給ヲ円滑ナラシムル為ニハ此ノ際資本ノ蓄積ヲ図ルノ要アリ」（四月十九日閣議申合せ）として、国民貯蓄奨励の一大国民運動を起し、大体今後一年間に八十億円程度を目標として国民の貯蓄の大増加をはかることとなつた。

八十億円の内訳は、発行される国債の償還に五十億円、「日満を通ずる軍需産業その他時局関係産業の生産力」の一層の拡大に三十億円を見込んだものであつたが、「日露戦役当時のやうに一部を外資に仰ぐことを期待できない今日、その殆んど全部は国民の貯蓄の結果集つた資金に俟つよりほかに方法がない。これ政府がこの際、貯蓄奨励の国民運動を起した所以であり、又国民がぜひ貯蓄をしなければならない理由である」とした。

現在から見れば、正直といえば誠に正直である。つまり、「支那事変」は諸外国から理解のされない戦争であることを認識していたということになるからである。しかし、その付けは国民に廻された。国民による貯蓄が戦費の唯一の頼りだということであつた。国民による貯蓄は「長期戦に備へる銃後国民の責務として、今日から貯蓄を実行せられたい」と、いささか強圧的でもあるが、「国民は戦線にある同胞の艱苦を思ひ浮べて真によく時局を認識し、今回の貯蓄奨励運動の趣旨を理解し、一致協力して日常の生活業務に際して油断なく貯蓄を実行してもらひたい」と、国民の理解を求めた。

八十億円貯蓄の目標は達成されたのであろうか。

国民貯蓄奨励運動開始以来一ヵ年間の貯蓄増加額を参考までに掲げると、目標八十億円に対して七十三億八千万円に上つてゐる。

政府がこの運動を起してからちやうど一年三ヶ月になる。当局者としてはこの週間を施行するに当つて、実に感慨深きものがある。昨年度は八十億円を目ざして、まつしぐらに突き進んだ。未だ十全の効果は得られなかつたが、目

的額近くまで達したことを喜びとする（略）、同時に本年度に於ても一層の御協力あらんことを切望する次第である。

「本年度に於ても一層の御協力あらん」と「切望」したのは、貯蓄額の目標を昭和十三年度の八十億円から十四年度は百億円としたからであった。前文は「百億円貯蓄と国民生活」（「週報」第一三九号、昭和十四年六月十四日）の一節であり、この年、六月十五日から二十一日まで一週間にわたって「百億貯蓄強調週間」が設定されたのは、「我が国が現在の財政経済状態の下にあつて、貯蓄の一大増加が極めて必要であることを、国民一般に徹底させ、以つて貯蓄報国の念を更に高調し、この機会に尚ほ一層貯蓄の実行に邁進せんがため」であるとされた。

支那事変は既に新たなる段階に入り、武力戦と併行して、大陸経営の進行を見つゝあり、これがためには今後一層の巨額の資金と、多量の物資を要するのであつて、この際現段階に即応して、よく長期にわたる経済戦に堪へるやうな体制を整へ、本年度の目標たる百億貯蓄の達成を期さうとするものである。

貯蓄目標が八十億から百億へと設定されたのは、武力戦と大陸経営による巨額資金が必要となったからであるという。しかし、八十億円を目標とした際の事情は、いっこうに変わっていなかった。その事情とは「日露戦役当時のやうに一部を外資に仰ぐことを期待できない今日、その殆んど全部は国民の貯蓄の結果集った資金に俟つよりほかに方法がない。これ政府がこの際、貯蓄奨励の国民運動を起した所以であり、又国民がぜひ貯蓄をしなければならない理由である」とした事情であった。

四　小学生と百億円貯蓄

百億円貯蓄は、「支那事変は既に新たなる段階に入り、武力戦と併行して、大陸経営の進行を見つゝあり、これがためには今後一層の巨額の資金と、多量の物資を要する」（「百億円貯蓄と国民生活」前出）からであり、このことを内容とす

るのは、次の「支那事変貯蓄債券」（長野県上水内郡水内尋常高等小学校高二・塚田年美）。

支那事変下の我が大日本帝国の国力を充実し、一つには長期に亘る所の経済戦に耐へ得る大切な力を養ふ為には、挙国一致をして勤倹貯蓄をすることが何よりも大切であります。支那事変貯蓄債券は実に、此の重要なる所の国民の貯蓄と言ふものが容易に成し遂げられるやうにと政府が考慮して発行されたものであって、国策を成しとげんが為の債券である故に、国策債券と称するのであります。其の事務に政府の命を受けて携つて居るのが日本勧業銀行であります。そして此の債券の売上の代金全部が政府に納められ、政府では之を公債の消化や其の他国家の必要な方面の費用に充てるのでありますから、此の債券を求めると言ふ事は結局は銃後の国民としての本分を竭したと言ふ事になるわけであります。

今や支那事変も長期の戦争と建設とを併せて進めて行くやうな段階に入りました。此の際、私共国民は益々堅忍持久し、新しい東亜の建設の為に、挙つて国策債券を購入して、貯蓄報国に向つて邁進しなければなりません。

誠に見事な「百億円貯蓄」の理解である。「週報」は、政府の情報誌であり、政府の意図を国民に伝える役割を担っているわけであるが、その「週報」の記事であるといっても過言ではなかろう。筆者は「高二」、つまり高等科二年生であり、現在の中学二年生に当たる年齢である。

次の「支那事変貯蓄債券」も高等科二年生による作品（滋賀県野洲郡北里尋常高等小学校高二・三崎清）。

支那事変は勃発して以来今日で三星霜、何時まで続き何時止むとも想像する事は神ならぬ人間では不可能である。事変は今や新段階に入り、本年度までに消費した戦費実に百二十億円、本年以降の戦費をも合し計算すれば如何なる数に上るかわからない。正に我が国未曾有の大巨額戦費である。尚武力戦と併行する新東亜の建設に要する資金、其の他あらゆる方面にも金、物資を必要とする。

今後は巨額の資金と多量の物資が必要で、若し之が無ければ我が国は戦を続ける事が出来なくなり、欧州大戦に於

ける独逸の如き運命となるであらう。資金や物資を輸入して支払ふ金は、過ぎし日露の役の如く外資による事は全然不可能で、悉く国民の汗の結晶より捻出しなければならない。此処に於いて益々一億同胞が貯蓄奨励運動に参加する必要が迫つて来るのである。

貯蓄には色々の種類方法があるが、尤も興味あり信用あり、且つ多大の利益が得られ国の為となる点に於いては、日本勧業銀行の発行による支那事変貯蓄債券に並ぶものはなからう。しかも之を多く求める事により、国家に対しては忠、先祖に対しては孝、又我等の理想たる新東亜の建設を招来する結果となる。正に「一石二鳥」とは此の場合を云ひ現はした語であらう。支那事変貯蓄債券購入こそ我が一億同胞の望む絶好の貯蓄法である。

目下日英関係風雲急を告ぐる時、国民が頻りに「排英々々」と叫び、示威行進を行つたり、交渉外交官に激励文を送つたりするのも良いが、果して大効果が得られやうか。われ〳〵は無駄に費す時間を余計に一生懸命に働き、其の利益で支那事変貯蓄債券を一枚でも多く買ひ求め、其の愛国の熱情を老獪極まる英国民に見せ、或ひは其の狂犬英吉利の性根をたゝき殺すに足る経済力を養ふ様に努むべきである。此の方法が英国の極東に於ける地位を譲歩せしめ、反省を促す最適の方法であらう。

明治天皇は御製に

国をおもふみちにふたつはなかりけり
軍の場にたつもたゝぬも

と仰せになつた。支那事変貯蓄債券を買ふ事も此の御精神に副ひ奉る所以である。

凡そ大日本帝国の国民たる者は良く此の債券報国の精神を諒解し、以て国家の経済力を固め、自己の利益を増進し、東亜新秩序の確立に全力を挙げて尽力すべきであらう。

何とも見事な檄文ではなかろうか。小学校の最高学年である高等科二年生の到達した時局への認識には、驚くばかりで

ある。教師の教育的効果の大なるところといったところか。

「先生」は、一年生には、紙製の貯金箱を配りながら「オクワシモカハナイデコノハコノナカニイレマセウ。オチヤウメンヤエンピツモナメナイデダイジニシテ、シマツシタオカネヲコノチヨキンバコニイレテイツパイニナツタラ、シナジヘンチヨチクサイケンヲカヒマセウトオツイヤイマシタ」（静岡県浜松市佐藤尋常小学校ジン一・松本房吉）。「先生」は、児童のお菓子を制限し、学用品も大切に使うことを教え込み、支那事変貯蓄債券へと導いていく。児童らは「ミナ、ハイ、トオオキイコエデオヤクソクシテ」、貰った貯金箱を持って、「ウレシガツテオウチヘカヘリマシタ」。誠に、純真である。

二年生には、「せんせいは今日本はしなとせんそうをしてゐるので、おかねがたくさんいりますから、きばつてちよ金をしませうとおつしやいました」（兵庫県津名郡洲本第二尋常小学校尋二・藤原章）。二年生には、貯金をする理由が示された。

三年生には、どうであろうか。「この間学校で支那事変貯蓄債券を買ふやうにといつて、貯金箱をいたゞきました」が、「貯蓄債券を買つてどうするのか」私はわからなかつたので、お家に帰ってお母さんに教えてもらったというのは、兵庫県神戸市須磨尋常小学校三年生の鏑木啓子。特別に理解が遅れている児童ということではなかろう。その役割を「先生」は分かるように説明しなかったということであろうか。

四年生には、「今日私は貯蓄債券の事を先生からきいた。まだ貯蓄債券といふものは一度も見た事がない。どんなものだらう」（愛媛県新居郡神戸尋常小学校尋四・伊藤マサ子）という。「先生」は、「貯蓄債券」の説明をどのようにして行ったのであろうか。「見た事がない」ものを理解するのは、甚だ困難だ。

五年生には、「無駄遣ひをしないで全国民が貯金をする事は、国に忠義をつくす事です」（埼玉県北埼玉郡手子林尋常高等小学校尋五・木本高）と諭し、「支那事変貯蓄債券の話をくはしくお話になられ（略）、君達も支那事変貯蓄債券を買ひなさい」とおっしゃったという。「先生」は、立派な勧誘員である。「僕達は一そう貯金して、その金で支那事変貯蓄債券

を買つて、大いに国のために忠義をつくさうと決心している」と、覚悟を記す。「先生」の言葉の持つ影響力は強力である。

六年生の授業を内容としたのは、新潟県中蒲原郡石山第一尋常高等小学校尋六・浅井健吉の作品。

先日学校で書方の時間に「一億一心百億貯蓄」の標語を書かせられました。其の時、先生が、「今は日本と支那と戦争をしてゐますが、兵隊さんばかりでなく全国民が戦つてゐるのです。戦争に入用な砲弾、飛行機、戦車等みな国民がくはを持つて畠を耕したり会社へ行つて働いたりいろ〳〵国民が精を出して働いたのによつて出来たのです。私達が毎日一枚の紙を大切にしておけば百日たてば百枚の大変な紙になります。かうやつて一銭でも二銭でも貯金をすれば「ちりもつもれば山となる」、やがて大金になり兵隊さん達の武器を買入れることが出来るのです。此の紙やお金などが砲弾になり爆弾になつて私達の身代わりとなつて働いてくれてゐるのです。ですから皆は出来るだけ倹約し、進んで働いて余つたお金はすつかり貯金をしたり、国債や債券をかつたりして立派に皆さんの身代わりにならせて下さい」とおつしやいました。

六年生には、国債や債券が皆さんの身代わりだといい、「皆さんの身代わりにならせて下さい」と訴えた。皆さんが戦う代わりに国債や債券に戦わせているのだから、しっかり貯金して国債や債券を買うべきであるとの論理である。

こうして「先生」は、学年ごとに「支那事変貯蓄債券」について教育してきた。学年が進行する毎に、その内容に背景を濃くし、厚みを増して、貯蓄債券の購入を働きかけてきたということになる。

「先生」の児童への百億貯蓄の勧奨は、教育的説明だけではなかった。「私達の貯金」（宮城県栗原郡鶯沢尋常高等小学校尋五・千葉稔）には、「僕等の級には後の方に貯金に入つた人を青い棒、月に一人当たりいくら貯金したかを赤い棒で書いた表がはつてあります」という。この組の児童は四十七人で、六月現在、三十四人が貯金をしているというが、先生は「まだ〳〵いけない。夏休み前になんとかして全部入らなければならないね」と目標を立てた。

我が国では百億のお金が欲しいのです。だから皆んなで心を一つにして百億の貯金をしませう。先生は「貯金の出来ない人は腹を切つて死になさい」と言つた。

何とも恐ろしい「先生」である。学校における学年別での目標額があって、その達成を期したのであろうか。「債券」（三重県度会郡西尋常小学校尋六・朱谷真人）には、「こんども又学校で債券を募集する（略）、学校への申込は皆で五十七枚五百七十円であつた」とある。この学校の児童は五十七人であり、一人が十五円の債券を一枚ずつ買ったということになる。学校への割当或は消化目標があったことを推測させよう。

さて、「貯金の出来ない人は腹を切つて死になさい」と言った「先生」対して児童は、次のように記した。

僕は此れはあたりまへだと思ひます。戦地で働いて居る兵隊さん方を思つたら一月十銭ぐらゐどうしてもつめるだらう。先生の言つた言葉は銃後の国民一億民の守るべき言葉だと思ひます。此のやうにどんどん貯金したならば、天皇陛下は大へん御喜びになるでせう。僕は沢山貯金して御国のためにつくします。そして銃後の国民としてのつとめをする決心です。

時局柄に生活せざるを得なかった当時の児童にとって、一般的な覚悟といえようか。国債や債券が児童の身代わりに戦い、貯蓄を達成すのは銃後の国民の義務であり、それが「天皇陛下」を喜ばすことであり、「天皇陛下」が喜ぶことが「御国のため」なのである。

「僕の貯金」（宮崎県延岡市恒富尋常小学校尋四・越智緑朗）は、「僕たちは子供だから戦争に行くことはできません。しかし、銃後で貯金をする事は僕たちの戦争です」と記し、「支那事変国債と債券」（大阪市榎並尋常高等小学校高二・宗忠智恵子）は「私達は戦地へ行つて忠義は尽されませんので、せめて国債や債券だけでも買ひ求めて国家非常時に際して少しでも御国の為に尽さなければなりません」と記した。

貯金をし、国債や債券を買うことが、戦地へ行くことのできない「僕たち子供」や「私達」女子児童の、「戦争」であ

り「忠義」を尽すこととだとの認識であるが、この認識は児童だけのものではなかった。「支那事変貯蓄債券」（北海道常呂郡温根湯尋常高等小学校尋六・島田光夫）には、「父さんは兵隊さんでないし戦地で御奉公が出来ないから、うんと辛棒してせめて債券でも買つて御奉公してゐる」との一節がある。また、「支那事変貯蓄債券」（栃木県那須郡谷川尋常小学校尋六・神野道子）には、「お母さんは兵隊さんになれなれないから」貯蓄債券を求め、「いゝ御奉公だといわれた」とある。

児童にとっても、また大人たちにとっても、戦場へ行かないもの、行けないものにとって、貯蓄債券の購入は銃後の努めであり、お国への「御奉公」と認識されていた。

それはまた、一家個人のご奉公ではなく、地域におけるお国へのご奉公でもあった。「貯蓄債券」（静岡県駿東郡清水尋常高等小学校高二・山下重臣）では、「出征軍人の送迎や村葬の時にいつも代表として出席せられてゐる見覚えの婦人会長さん」が、婦人会として「銃後の婦人として幾分でも報国の誠をつくさうではないかと申し合わせ」、債券を売りに来ていた。母は、「貧乏で暮してゐてもその位の事は何とか致します」と応じた。何とかしなければならなかったのである。母は、五円で債券を買ったが、その金は「お前の夏服を買つて着せてあげるつもり」で取って置いたものであった。「支那事変貯蓄債券」の意図が見え始めた。

五　小学生と「支那事変貯蓄債券」

児童にとって「支那事変貯蓄債券」を手にすることはどういったことであったのだろうか。「支那事変貯蓄債券」（岐阜県武儀郡洞戸尋常高等小学校高二・河合音次）に、次の一節がある。

ラヂオ体操の前に校長先生が債券の話をして、終りに「家へ帰つてお父さんに買ひなさつたか聞いてみよ」と言わ

れたので、帰つて来て父に「お父さん、家、債券買つてるかな」と聞くと、父は「うん、たんとも買へないが五円のと十円のと二枚買つて有る」と言はれたので先づ安心した。

一億一心国民平均百円の貯蓄をすべき今、五円の債券を買ふ事によつて、銃後の務めの一部を果す事ができるのなら、なんとかして僕も一枚でも買ひたいと考へた。

児童にとって、「支那事変貯蓄債券」が家にあるかないかは、心を煩わせるものであった。「非常時局下の銃後国民の報国精神を表す」貯金である百億円貯金への参加は、「帝国臣民」としての義務を果しているかどうかであったからである。父がとりあえず買ってあったので「安心した」が、自分でも一枚買う算段をつけなければならない。姉の知恵で、夏休みに計画していた名古屋への旅行を諦めて債券をかうことにした。「幾分の御奉公」と決心したが、家の外では、「皇国の為に召された兄を祝ふ国旗がくつきりと青空に翻つて居た」。兄は出征中であり、自分も銃後で報国するために債券を買うことにしたのであったが、それは、自分の計画を断念することであった。

「支那事変貯蓄債券」（群馬県北甘楽郡黒岩尋常高等小学校尋六・斉藤昭子）には、「支那事変国債」の小額を買いに行ったら売り切れていて「五十円や百円の大口では手が出せない。大衆的の小口でなければ」と落胆している父親に、児童は「今度貯蓄債券が売出しになつたらすぐ買つてくるね」と力づける様子がある。

「貯蓄」（新潟市二葉高等小学校高二・谷庄衛）には、「最近は安い五円の小額債券も発行されて、一般の人々にも買ひやすくなつてきた」の一節がある。「支那事変貯蓄債券」が発行された当初は、額面十五円券が十円の払込で購入できたが、それでも庶民には、なかなか買うわけに行かなかったということで、昭和十三年十二月の第七回貯蓄債券には額面金額七円五十銭が発行され、五円の払込金で購入することが出来るようになった。

「事変債券」（岩手県岩手郡宮内尋常小学校高一・中島源三）では、これまでの貯金が「七円二銭」貯まっていたので、額面「七円五十銭の債券」を買うことが出来た。従って、この児童が手に入れた「事変債券」は、昭和十三年十二月以降

ということになる。この児童の貯金は、「廃物利用を行つて無駄な物を買はず、或ひは廃物を拾ひ見つけて売つたお金」を貯金箱に貯めていたものであった。

「債券について」（山梨県東山梨郡加納岩尋常高等小学校高二・日原茂温）では、「春蚕に汗水流して真の労働精神をねりつゝ手伝つたのでその効あり、叔父より金五円を御褒美に戴き」、その五円で債券を買ったという。

「支那事変貯蓄債券」（栃木県下都賀郡中尋常高等小学校尋六・見目雅夫）では、「四円三十銭」の貯金に、母が「お前も田植にはうんと働いたんだからほうびとして足らないところは足してやらうよ」と七十銭出してくれたので、五円で債券を手に入れた。

十円の債券を買ったのは、横浜市吉田尋常高等小学校尋六・丹羽元司。自宅にあった古新聞・古本などを「くづ屋さん」に売って、それまでの貯金を合わせて貯蓄債券を買った。売ったのは、少年倶楽部やキングや婦人倶楽部などであった。

児童が「支那事変貯蓄債券」を手に入れられたのは、夏休みの計画を諦めたり、小遣いをため、廃物を売ったり、家業を手伝った褒美であったり、また、家の廃物を自分のものに出来たことによる。言うまでも無いが、自分個人で働いた金で購入することは、「小学生」には、どだい無理な話であった。

夏休みの旅行を諦めて買うというが、それは、そもそも家の金であろうし、家業を手伝って足りない分を補うというのも、やはり家の金ということになる。

すなわち、「小学生」にとっての「支那事変貯蓄債券」とは、小学生の小遣いを目当てにしての貯蓄奨励であり、それは家庭に眠る小額資金を回収する装置でもあった。また、廃物や鉄屑を回収換金し、貯蓄へと誘導する態勢は、児童の戦時経済への動員であり、「貯蓄報国」という名の、児童の国家への取り込みであった。

婦人会長を先頭にした債券購入への勧誘によって、「お前の夏服を買つて着せてあげるつもり」で取って置いた五円は消えた。夏服は「支那事変貯蓄債券」に姿を変えた。そして、この債券の償還は抽選によって割増金が付くことになって

いた。ただし、その割増金は、「全部又ハ一部ヲ国債証券ヲ以テ交付スルコトアルヘシ」とされていた。昭和十三年十二月発行の額面金額七円五十銭の満期は十六年であったから、運悪くすれば、昭和二十九年にならなければ戻ってこない金であり、戦後、これらが紙屑になってしまうとは、購入した者の大半にとって、思いもかけないことであったろう。

以上、『小学生と支那事変貯蓄債券』について検討してみたが、日本勧業銀行が学校を通じて紙製の貯金箱を児童に配ったのは、巨額な戦費を賄う為に発行した「支那事変貯蓄債券」の消化を小学生の懐、すなわち家庭における小額資金を回収しようと狙ったキャンペーンであり、この冊子を刊行したのは、銃後の少国民の戦時経済への取り込みを「学校」という教育装置を駆使する目論見であったといえよう。

「東日小学生新聞」第九七六号（昭和十四年十一月九日第二面）は、「貯金の綴方に塚越君が優等」の記事を掲載した。「少年倶楽部」が募集した「貯金のよろこび」の優等当選者であるという。

また、愛国児童協会は、昭和十五年十二月五日に『貯蓄奨励児童優秀綴方集』を「紀元二千六百年記念」と副題して刊行した。学年ごとに一等大蔵大臣賞、二等国民貯蓄奨励局長官賞を選定したもので、昭和十五年の貯蓄目標「百二十億円」達成へのキャンペーンであった。商業雑誌が、或は愛国児童協会が懸賞綴方を設定したのは、戦費調達への意識醸成であり、政府にとっては、そうした環境を作り出す必要に迫られていたということであろう。

（二〇〇八・一・一〇）